

化を確認するようになっていた。先程発表の方は兎のみに統一した
そうで大変結構であるが、日本版C・A・Tがリスを用いたのは兎
では親しみやすい点がかえって欠点になりはしないか（昔からの話
の中にもうさぎはよくでくる）ということからである。

他の動物を登場させたのもトラでさえもやさしく反応することも
あるからである。

時間があれば、日本版C・A・Tの結果をも申し上げるのである
が、今回はベラック版C・A・Tの限界を申し上げ、更に新しい方
法として母親のアソウカ体験についてお話したわけである。

Finger-painting (2057)

—保育しにくい幼児に施行せる結果—

大阪市立大学児童学研究室

小西勝一郎

並河信子

1. 目的

指絵の治療的効果については、すでに多くの研究があるが、我々
は幼稚園で保育しにくい幼児に指絵を描かせ、指絵が幼児の行動に
いかなる効果を及ぼすかを明らかにせんとし、次の如き手続による
研究を行い、併せて彼等の指絵の特性について分析を行った。

2. 手続

研究の対象は、大阪市立日吉幼稚園及び私立堀江幼稚園に於て、
担任教師によって最も保育しにくい者として選ばれた一七名（平
均年齢6.26 \pm 0.31年、平均I・Q100.48 \pm 13.32以下E群とする）
及び之と比較するため選んだ保育し易い幼児一七名（平均年齢6.26
 \pm 0.40年、平均I・Q112.76 \pm 9.26以下C群とする）である。

指絵の効果を判定するために、実験の前後に幼児の行動を評価す
るよう担任教師に依頼した。（評価は幼児指導要録についている行
動評価表による）

保育しにくい子供として選んだ理由として、教師によれば内向
的、消極的、無口、依頼心が強い、注意散漫、我儘、攻撃的、自己
中心的、共同生活の秩序を乱す、落着かない、神経質、喧嘩をよく
する、興味がかたよっている等があげられている。

E、C両群中夫々九名（F群）に対し、一週間間隔で一枚づつ継続
的に指絵をかかせ残りの幼児（non E群）にはかかせなかった。

今回は実験に先だって、保育室において、全園児に一度だけ、指
絵の経験させ、実験中はとりたてて説明しなかつたことと、指絵
具は無意配列した赤黄緑青茶黒及び紫の七色を用いた他は、描画の
手続はすべて前回に準じた。

なお一人の幼児の描いた指絵の合計は、病氣其他の理由で必ずし
も一致せず、最低四回から最高七回であった。

期間は一月から三月迄である。

3. 結果

1. 指絵の効果について

整理として先ず担任教師によってなされた行動評価の各項目は三

段階に品等されるから、之に応じて「1.0.1」の得点を与え、各カテゴリー毎に合計点を求める。次いで各々四群について前後二回の行動評価平均得点の差を求め、更に此の差について各カテゴリー毎にE F群とE non F群、C F群とC non F群、E F群とC F群、E non F群とC non F群の差を算出したところ次の結果が得られた。

E F と E non F 両群間の差は各カテゴリーについて「社会生活」を除いた外は正の数値を示し、C F群とC non F 両群間では、カテゴリーの半数に（身体、仕事の習慣、社会生活、自然）負の数値が認められる。このことは、他の条件が同一と仮定する限り、保育しにくい幼児と保育し易い幼児に継続して指絵をさせた場合、前者に対して、はるかに効果が多く、後者に対しては寧ろ負の効果があることを示すものであり、Lowenfeld の説を肯定しているものとも考えられる。我々は幼児に指絵を与える時、なお検討されるべき多くの問題を持ち、これを無批判に受入れることは望ましくないのであろう。

E F群とC F群、E non F群とC non F群間の差については、「健康習慣」のカテゴリーを除いて全て正の数値を示している。共に保育しにくい群が進歩の率が大きき。これは、保育しにくい幼児に対して教師の保育努力がより多くなされ、その効果のあること、此等の特性におけるE群の成熟の程度の高いこと、或いは指絵がC F群に阻害的效果をもつこと等に基因するものであろう。

2. 保育しにくい幼児の指絵の特性について描画枚数は子供によって一致しなかったから四回迄のものについて、両群を比較検討し

たところE群の特性として次のものが見出された。

- a 最初に使用する色彩は紫が多く黄が少い。
- b 人差指のみで描き、手の他の部位を用いないものが多い。
- c 湯、手拭の使用が多い。
- d 同じ構図内容に固執するものが多い。
- e 壺より取り出しした絵具を塊のまま紙面に残しておくものが多い。
- f 描画時間は稍短かい。

4. 結 論

幼稚園の保育しにくい幼児を対象に指絵を継続的にかかせ、その治療効果並びに指絵の特性を明らかにせんとした。

指絵は保育しにくい幼児にとって望ましい効果をもつが保育しやすすい幼児には必ずしもそうでないことが暗示され、保育しにくい幼児の指絵の特性として若干のものが見出された。併しながら我々の研究は対象が極めて少く、短期間であり、統計的検定を行っていないこと、保育しにくい幼児の型、原因について分類していないこと、教師の行動評価について信頼度を調べていないこと、群のわけ方その他整理の方法等に検討すべき点が極めて多く之等については更に将来の研究にまちたい。